

原爆文学研究会事務局  
〒814-0180 福岡市城南区七隈8-19-1  
福岡大学人文学部 中野和典研究室内  
tel:092-871-6631 (代表) /e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

## 第56回 原爆文学研究会のご案内

時下益々ご清栄のことと存じます。第56回原爆文学研究会を下記の要領で開催いたします。皆さまには、ご多忙のことと存じますが、万障お繰り合わせの上お集まりくださいますようお願い申し上げます。

会場・資料の準備の都合もありますので、参加をご希望の方は**2018年7月20日(金)までに「①研究会一日目」「②懇親会」「③研究会二日目」のそれぞれについて参加／不参加を明記して事務局にeメールかお電話でお申し込みください。**

### 記

- 日時：2018年7月28日(土)・29日(日)
- 会場：神戸センタープラザ 17号会議室(センタープラザ西館6階)  
(〒650-0021 兵庫県神戸市中央区三宮町2-11-1 TEL:078-331-5311)

### ○ プログラム

#### 【1日目】7月28日(土) 13:00~18:15

- 12:30 開場
- 13:00 開会・自己紹介
- 13:20 憲法の人間観と災害(核被害) 池田 清
- 14:40 (休憩15分)  
ワークショップ「炭鉱と原爆の記憶——文化運動・被爆朝鮮人・遺構から考える——」
- 14:55 司会より 楠田 剛士
- 15:05 報告1 1950年代「原爆の凶展」と炭鉱文化運動 岡村 幸宣
- 15:35 報告2 炭鉱と原爆をつなぐ——雑誌『辺境』を視座に 奥村 華子
- 16:05 報告3 遺構を通して考える〈炭鉱〉と〈原爆〉 木村 至聖
- 16:35 (休憩15分)
- 16:50 全体討論
- 18:10 事務局より
- 18:15 1日目閉会
- 18:30 懇親会

#### 【2日目】7月29日(日) 9:30~13:10

- 9:00 開場
- 9:30 被ばくと奇形——原爆映画におけるその表現と科学 中尾 麻伊香
- 10:50 (休憩15分)
- 11:05 「原爆文学」再読6——吉本隆明『「反核」異論』 坂口 博・村上 克尚・加島 正浩
- 13:05 事務局より
- 13:10 2日目閉会

※再読のテキスト、吉本隆明『「反核」異論』(深夜叢書社、1982.12)は現在手に入りにくい状況になっております

ので古書店・図書館などでご入手ください。

※今回はご宿泊については特にご案内しておりません。JR三宮駅周辺の宿泊施設に各自で早めにご予約ください。  
※7月28日(土)の11:00より同会場にて世話人会を開催します。世話人のみなさまはご出席ください。

### 【趣意文】ワークショップ「炭鉱と原爆の記憶——文化運動・被爆朝鮮人・遺構から考える——」

2015年に「明治日本の産業革命遺産」がユネスコの世界遺産に登録された。製鉄・製鋼、造船とともに、石炭産業に関する施設が日本の近代化を支えた遺産群として名を連ねている。三池炭鉱や軍艦島など、観光資源として見直される炭鉱は、エネルギー革命による斜陽化のイメージよりも、技術的・経済的発展を遂げた近代日本の基幹産業として語られる。

だが、炭鉱を日本のナショナルな記憶だけで語るとき、徴用工の労働というアジア・太平洋戦争や植民地の歴史を覆い隠すことになるだろう。戦後の朝鮮特需やサークル運動についても、冷戦構造下の東アジア情勢に強く結びついている。矛盾に満ちた生々しい炭鉱労働の記憶が、遺産化によって不可視なものにされつつあるのが現在の事態ではないだろうか。

本ワークショップは、こうした炭鉱をめぐる戦争・差別、文化運動、産業遺産の問題を、原爆の記憶の問題につなげる試みである。もちろん炭鉱と原爆は全く同じというわけではないが、ウラン採掘、核実験、核廃棄物の処理などの労働と植民地主義、原爆の使用が示唆された朝鮮戦争とそれに抵抗するサークル運動、被爆建造物の遺産化・観光地化など、いくつかの交点が考えられる。美術・文学・文化社会学の領域を横断しながら、労働と記憶の問題について幅広く議論を行いたい。(楠田 剛士)

### 【趣意文】「原爆文学」再読6——吉本隆明『「反核」異論』

吉本隆明(1924~2012)の没後、『「反原発」異論』(論創社、2015.1)が刊行されたことによって、あらためて吉本の核に関する発言が、さまざまな波紋をもたらした。かつての『「反核」異論』(深夜叢書社、1982.12)は、再読提案者にとっては、共感する事柄も多かった。それだけに、その後30年のあいだに、何が変わったのかを「再読」のかたちで確認していきたい。変貌したのは「時代」なのか、「私たち」なのか、吉本なのか。共感しつつも、80年代にはいつて膨大に刊行され続けた対談本・語り本・講演集に辟易して、かえってほとんど読まなくなった吉本の晩年30年を辿りつつ、考えてみたい。(坂口 博)

### 会場のご案内

